



港湾都市・基隆を訪ねる

片倉 佳史

台湾は多くの人々を惹きつける魅惑の島。その歩みについて述べてみたい。日本とも関わりの深い台湾の歴史について、都市ごとに紹介していきたいと思う。今回は台湾北部の港湾都市・基隆を紹介したい。それぞれの都市に宿る個性がどのように培われてきたのか、そういった部分に触れながら連載を進めていきたいと思う。

基隆

チーロン（台湾華語・北京語）

けーらん（ホーロー・台湾語）

きいるん（日本語）

台湾の門戸として栄えた港湾都市

基隆（きいるん）は台湾北部に位置する港湾都市である。台湾北部の玄関口で、日本統治時代、台湾に渡ってきた日本人の大半はここで上陸の第一歩を遂げた。そして、1945（昭和20）年、敗戦によって引き揚げる際も、ここが台湾に別れを告げる場所だった。戦前に台湾との関わりをもった日本人であれば、誰もが特別な思いを抱く町である。

基隆は港とともに発展した。内地と呼ばれていた日本本土との間を結ぶ「内台航路」の発着地として知られたが、同時に、国際交易港としても名を馳せた。その歴史は17世紀に遡るが、本格的な発展を遂げたのは日本統治時代に入ってからであり、築港工事が施された後の話である。

基隆は別名を「雨港」という。この一帯は海上より吹きつける季節風のため、冬場になると、決まって天候が崩れる。町は港湾以外の三方を山に阻まれており、海上で発生した水蒸気は山並みに遮られて雲となり、降雨をもたらず。基隆と台北は距離でいえばわずかに28キロしか離れていないが、基隆で雨が降っていても、台北は晴天ということが少なくない。雨の基隆駅を出た列車が十

分もせず、トンネルを抜けるだけで青空を見ることがあるほどだ。

基隆には一つ、小さな笑い話がある。毎年11月頃から翌年3月初旬まで、基隆では毎日のように雨が降る。ある年、元旦に青空が見えた。基隆の元旦と言え、必ずや雨降りと決まっているので、人々は「珍しいことがあるものだ」と語り合ったという。しかし、翌日からは雨が降り始め、その後、31日まで毎日雨が降ったという。いかにこの地に雨が多いかを物語るエピソードである。

また、台湾の人々は基隆へ向かう友人に対し、「財布を忘れても傘は忘れるな」と声をかけるという。先に述べた「雨港」という呼称については、この時期に基隆を訪れれば、誰もが納得できるに違いない。基隆郊外に位置する暖暖（だんだん）測候所の記録では、年間200日の降雨は珍しくなく、大正時代には一年で300日も雨が降ったこともあったという。

また、降雨の時期は海上も荒れる。古くは降雨期に基隆港に着岸するのは困難とされていた。築港工事が施されるまでは、船体の小さい漁船は港内の航行すら、ままならなかったという。

港都・基隆の歴史

「基隆」という地名の由来は興味深い。漢人系住民がやってくるよりも前、この一帯はケタガラン族の人々が群居していたという。ケタガラン族は平埔族（平地原住民）に分類される部族で、台



基隆港の様子。現在も高雄港に次いで貨物取扱量第2位を誇る。



基隆は台湾北部最大の港町。軍港としても重要な存在で、終戦まで市内全域が要塞とされていた。

湾北部に居住していた人々である。後に漢人住民との混血を経てアイデンティティを失い、現在にいたる。

明国時代の末期、漢人住民が台湾南部から土地を求めて北上してきた。そして、先住の人々と幾多の葛藤を繰り返す、一方では混血をしながら、この地に定住していった。

転機となったのは1626年のことである。この年、フィリピンのルソン島を拠点としていたスペイン人が洋上に現れた。スペインは台湾南部に拠点を果たしたオランダに対抗し、台湾の東海岸を北上してきてこの地にやってきた。そして、現在は和平島と呼ばれている社寮島に要塞を築き、これをサンサルバドル城と名付けた。小さな漁村は一躍、外国勢力の拠点へと変わったのである。

しかし、キリスト教の布教にも人々の馴化にも失敗したスペインは、わずか16年で台湾から撤退する。そして、オランダも鄭成功によって台湾から駆逐された。その後、18世紀に入った頃からは漢人住民の移住が急増する。中南部の平野部を開墾し尽くしてしまったため、新天地を求めて北上してきたのである。

1840年頃には、この地に戸数700あまりの集落があったという。そして、1857年にアロー号事件が勃発。翌年6月に清国が英仏をはじめとする欧米列強と天津（てんしん）条約を結んだことで、基隆も世界史の中に組み込まれる。

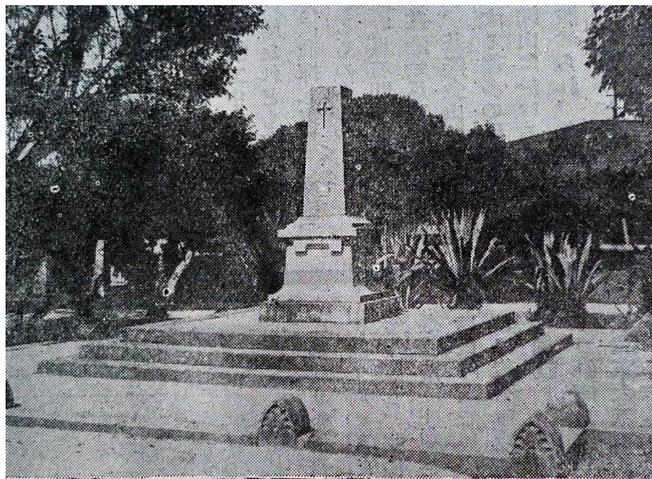
この条約は広範な外国特権を規定しており、不平等条約の根幹となったことで知られるが、ここで安平（あんぴん）と淡水の二港が開かれることとなった。基隆はこの時、副港として打狗（現在の高雄）とともに税関が置かれることになった。

ちなみに、天津条約は締結後に清国が批准を拒否するという暴挙に出た。そのため、英仏は再度清国に侵攻し、北京を占領。1860年10月、ロシアの仲介によって北京条約が結ばれる。これによって、ようやく天津条約が履行された。そのため、基隆の開港も遅れ、1863年となっている。

その後、1884年にはベトナムの領有を巡って清仏戦争が起きる。同年8月5日、フランス軍はアメデ・クールベ提督率いるフランス極東艦隊を台湾に派遣し、基隆湾を攻撃。沿岸砲台を破壊し、部隊を上陸させたが、間もなく劉銘傳の率いる部隊が来援し、撤退することになる。

10月1日には再びフランス軍による攻撃が始まり、この時は1800名の兵士が基隆に上陸した。しかし、フランス軍は後に淡水にも戦線を広げたため、膠着状態が続いた。フランスは年末に打狗（高雄）や安平を海上封鎖し、翌年には戦力増強も実施したが、清国の激しい応戦を受けた。

戦闘は8ヶ月におよんだ。1885年6月9日に締結された天津条約（李・パトノール条約。先述



碑 念 記 濱 - ペ ル - ク

フランス人墓地。清仏戦争は8ヶ月におよんだ。風土病に倒れる者が多く、戦病死者を埋葬した墓地が設けられた。一帯の浜辺は提督の名にちなんでクールペー（クールベ）浜と呼ばれた。現在は埋め立てが進み、砂浜は全く見られない。『台湾大観』より

の天津条約とは別のもの)によって休戦になるまで、澎湖諸島がフランスに占領され、基隆も1885年7月までフランスの攻略を受けた。

なお、この間、疫病に倒れる兵士が続出した。提督のクールペ自身もマラリアに罹患し、1885年6月11日、停戦合意がなされた直後に病死している。基隆には戦病死者を埋葬した墓地が設けられ、日本統治時代は史跡の扱いを受けていた。現在も墓地は残されている。

「基隆」を日本語でどう読むか？

1869年には「鷄籠」の表記が「基隆」と改められている。現在も基隆はホーロー語（台湾語）では「鷄籠」の漢字表記に従い、「ケーラン」と発音される。なお、「基隆」とは、「基地隆昌」という言葉にちなんだもので、この時点で、すでに軍事色が強い町だったことがうかがい知れる。

「基隆」の表記が日本統治時代、何と読まれていたかというのも興味深い。終戦まで、基隆は「きいるん」と呼ばれていた。戦前の台湾の地名は「蕃地」と呼ばれた原住民族の居住地域以外、漢字表記を日本語の音読みに従って読むのが通例だっ

た。ここはその中で数少ない例外となっていた。基隆は天津条約での国際登記が「KEELUNG」となっており、清国統治時代からこの名が定着していた。そのため、日本統治時代に入った後も「きいるん」とされたのである。

余談ながら、もう一つ、特別な読み方をした地名がある。それは台湾南部の安平で、これは「あんぴん」と呼ばれていた。ここは歴史ある港町で、古くは鄭成功の時代から日本と関わりがあった。そのため、現地で使用されていたホーロー語（台湾語）の「あんぴん」の発音が継承された。

基隆築港が始まる

基隆と日本は古くは倭寇（わこう）の時代より接点があったと言われる。しかし、統治者としての日本は1895（明治28）年6月2日に最初の接触をしている。初代台湾総督の樺山資紀（かばやますけのり）はこの日、基隆沖で清国全権委員の李経芳と台湾授受の会見を行なっている。調印式は横浜丸の船上で行なわれ、この時、台湾は日本の統治下に入った。

その後、小さな漁村に過ぎなかった基隆は順調な成長を遂げていく。その勢いは興隆の一途をたどったと言ってもいいほどである。しかし、その発展を支えたのは港の存在だった。

基隆湾はもともと天然の良港と言えるもので、手つかずの状態でも港の機能は有していた。しかし、日本統治時代に計画された港湾規模は大きく、工事も大がかりなものとなった。ちょうどこの頃は、台北の外港だった淡水港が土砂の堆積で港湾機能を失いかけていた時期に一致する。基隆港に寄せられる期待は大きかった。

築港は1899（明治32）年に始まった。完成を急ぐため、工事は昼夜を徹して進められたという。なお、この工事には治水事業や橋梁建設で台湾に大きな功績を残した十川嘉太郎が絡んでいる。

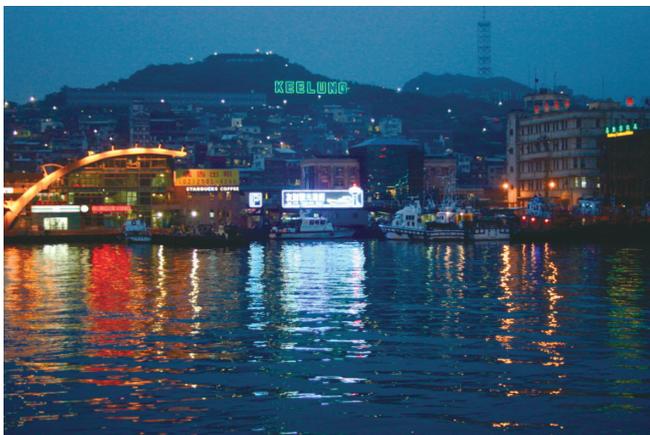
そして、港湾の完成を待たずに基隆は軍港とな

り、重要性を増していった。その後、終戦まで、一貫して付近一帯は要塞地区とされた。撮影はもちろん、写生ですら禁止されるという状態になった。そんな状況もあり、開かれた町ではなかったが、町の活気は特筆に値するものだった。各地に向けて連絡船が就航し、港付近は終日人影が絶えなかったと言われている。

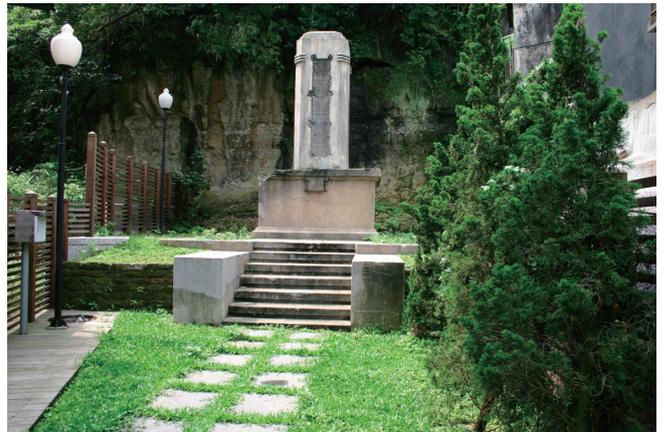
その後、基隆港は台湾の門戸として、重要な役割を担っていく。大正時代を迎える頃、港はすでに東西に655メートル、南北に1091メートルの規模となっており、大型船舶の航行はほとんど問題が起らなかったという。ちなみに当時、3000トン級の汽船なら35隻が停泊できたと言われている。その後も、拡張工事は続けられ、機能性の高い港として発達して知られていくこととなった。



日本統治時代の基隆市章。港都の名にふさわしく、碇の中に「キ」の文字が見える。



港湾とともに発達した基隆。1924（大正13）年には高雄とともに市制が施行されている。現在は約37万の人口を誇る。



領台初期、抗日ゲリラを鎮圧するべく派遣された近衛師団。これを率いた北白川宮能久親王の御遺跡地。碑陽の文字は戦後、国民党政府によって削られたが、石碑そのものは現在も残る。建碑は昭和8年。親王は明治28年6月4日から10日までここに滞在した。

なお、築港工事には当然、技師と多くの作業員が必要となる。総督府は技師を日本から呼び寄せ、労働者は各地から人を集めた。1930（昭和5）年末の統計によると、基隆の人口は8万7400人となっている。そのうちの約2万人は内地人が占めたという。ここで注目したいのは常時5千人を数えた外国人の存在である。その大半は日本国籍を得られなかった福州系中国人（福州人）で、主に港湾労働者として基隆に住んでいた。また、温州（うんしゅう）人も多く見られた。

築港とともに整備された家並み

基隆の町並みは築港工事と並行して整備された。最初の都市計画は1900（明治33）年に立てられている。基隆は日本の統治下に入った頃には、すでに北部でも指折りの賑わいを誇っていたというが、総督府は行政主導の都市整備を計画し、町作りを始めた。この時、道路は港湾に並行するか、もしくは垂直に交わるように整備された。つまり、港湾を中心として碁盤の目状の町並みが形成されたのである。その美しさは台湾随一とも言われた。

さらに1907（明治40）年の都市計画では整然と

した道路配置がより確固たるものとなった。この時には主要道路に沿った家屋が赤煉瓦建築で統一されたという。これらは正面上部に装飾を施した美しい建物で、現在もその一部が残っている。美しい景観を誇る商店街は瀟洒な雰囲気をもと、基隆の自慢となっていた。

台湾随一とも言われたこの都市景観は1927（昭和2）年8月27日に台湾日日新報社が一般公募によって決定した「台湾八景」にも選出されている。これは港湾と家並みを高台から見おろしたこの町の様子で、高台は旭が丘と呼ばれていた。後述するが、現在は蒋介石にちなんで中正公園と名付けられている。

しかし、整備が行き届いた町並みも、その美しさゆえ、戦時中は空襲の被害を大きく受けた。南部の高雄、そして澎湖島の馬公とともに軍事要塞とされていた基隆は、連日のように米軍機による空襲に晒された。被害は大きく、家並みはひどく荒廃した。

基隆市歌（作曲・一條慎三郎 作詞・加藤春城）

一、
天然なせる良港に 人の工（たくみ）の加りて
高砂島の関門と その名もしるく朝夕に
千船百船（ちふねももふね）入り集ふ 恵みゆたけき
我が基隆（きいるん）市

二、
陸に百貨のつどひ来て 海に無尽の宝あり
朝（あした）汽笛の音にさめ 夕櫓かいの義を太く
平和の潮（うしお）漲りて 生氣あふるる我が基隆（き
いるん）市

三、
旭ヶ岡に燦爛と 希望の光照すとき
かたみに睦びおのがじし 日々の勤めにはげみなば
自治の礎（いしずえ）ここになり 永久（とわ）に栄
えん我が基隆（きいるん）市



基隆港。対岸から埠頭の倉庫群を眺める。基隆駅の辺りは明治町、その先、北東に向かって、大正町、昭和町、仙洞町と続いていた。『台湾写真大観』より

無秩序な開発が進んだ戦後

終戦後、日本は台湾の領有権を放棄し、この地を去った。その後、中華民国国民党政府が新たな統治者として君臨するようになると、基隆も変容を強いられた。

基隆は国民党軍の上陸地となった。言い換えるなら、台湾の人々が最初に中華民国の実態を目の当たりにした場所である。そして、1947年の228事件についても、ここは蒋介石が送り込んだ増援部隊が上陸した場所となった。228事件とその後続いた白色テロについてはここでは記さないが、市街地はもちろん、郊外の八堵（はつと）でも大規模な虐殺事件が起こるなど、悲劇が繰り返された。さらに、住む家を持たない下級兵士たちによって空き地という空き地に不法家屋が建てられ、管理者がいなくなった公園や神社の神苑もバラックで埋め尽くされた。

現在、基隆を訪れてみると、慢性化した交通渋滞が目立つ。無秩序に建物が並び、活気はあるものの、ひどく雑然とした印象だ。これが基隆の戦後の姿である。もともと、市街地の面積は小さく、しかも、無計画な開発が進んで住環境は悪化した。

さらに、急激に増えた自動車によって道路は埋め尽くされ、市街地ではどこに行っても車の流れ

が悪い。苦肉の策で一方通行を多くしてはいるものの、それはまさに焼け石に水といった状態だ。今や町全体が排気ガスにまみれ、くすんだ町になり果ててしまった。

それでも、港町ならではの風情は色濃く残り、個性が感じられるのも確かである。最近では景観美化に力を入れており、公園の整備や建築物のライトアップ、港湾巡りのフェリーの就航など、観光都市への転身を模索している。

日本統治時代の基隆

基隆の市街地は港湾を挟んで「大基隆（だいきいるん）」と「小基隆（しょうきいるん）」に分かれていた。基隆駅のある側が「小基隆」で、こちらは駅を中心に、船会社や旅館、運送会社などが集まっていた。

これに対し、「大基隆」は基隆発祥の地で、本島人居住者が多かった。田寮（でんりょう）運河を挟む形で南岸に元町、玉田（ぎょくでん）町、双葉（ふたば）町、天神町などがあり、北岸に寿町、幸町などがあった。大正期以降になると、義重（ぎじゅう）町や日新（にっしん）町、真砂（まさご）町のあたりが内地人商業地区として発達するようになり、義重町通りが目抜き通りとなった。

基隆駅の脇には倉庫が並び、基隆税関の前を第1号岸壁とし、北に第18号岸壁まであった。その距離は4キロにおよび、貨物線が基隆駅との間を結んでいた。また、基隆駅付近は終戦まで明治町と呼ばれていたが、岸壁に沿って、大正町、昭和町と市街地が伸びていった経緯が見える。まさに港とともに発展した町であった。昭和町とその先の仙洞町は新興開発地となっていた。

基隆駅は縦貫鉄道の起点であり、同時に宜蘭（ぎらん）や羅東（らとう）、蘇澳（すおう）方面に向かう交通の要衝だった。近隣地域へはバスや手押し台車（トロッコ）による輸送が行なわれており、駅は終日賑わっていた。

漁業基地としても重要な地位を占めていた。終戦時、基隆の漁獲高は全台湾の3割以上を占めていたと言われ、水産加工業のほか、かつおぶしの製造工場などがあった。さらに珊瑚も基隆の特産品として知られ、内外にその名が知れわたっていた。

また、台湾北東部には広域にわたる鉄床が存在する。基隆はその積み出し港としても機能していた。基隆近郊にも炭鉄が数多くあり、瑞芳（ずいほう）や四脚亭（しきゃくてい）など、基隆川（現・基隆河）に沿って、無数の採掘場が連なっていた。これらは貨物列車によって基隆に運ばれることが多かったが、四脚亭炭鉄からは一部、索道を用いて田寮運河に運ばれるものもあった。



蓬萊丸の出航風景。日本本土との間には「内台航路」と呼ばれる連絡船が就航していた。終戦時、基隆には18の埠頭があった。



基隆港と家並み。整然とした道路に沿って赤煉瓦建築が並ぶ商店街。義重町から日新町にかけての様子。『日本地理風俗大系』より

港湾都市・基隆を散策

散策の拠点となる基隆駅は清国統治時代末期の1891年、劉銘伝が台湾巡撫（知事）を務めた時代に設けられた。台湾で最初に敷設された鉄道の起点駅であった。

日本統治時代の基隆駅は瀟洒な雰囲気をもっており、台湾を代表する名駅舎と謳われた。その姿は絵葉書にもなっていたほどだったが、老朽化を理由に1967年に建て直されてしまった。その駅舎も2015年に建て替えられ、現在は往時の面影を感じ取ることはできない。

基隆駅前には蒋介石の銅像が立っている。終戦まで、ここには初代台湾総督の樺山資紀の像があった。銅像は蒋介石のものにすり替えられたが、台座は日本統治時代のものが今も残る。なお、この蒋介石像は雨の町らしく、レインコートを羽織っている。

駅舎を背にして左手には基隆市営バスの乗り場があり、市内各所へ向けてバスが発着している。この乗り場の建物にも注目したい。駅からは建物の背部が見えるだけで、建物の正面は港に面している。ここは陽明海運という海運会社が所有者となっているが、かつては日本郵船の基隆出張所であった。

その隣には海関大樓という建物がある。ここは日本統治時代の基隆税関合同庁舎である。5階建ての建物で、竣工は1934（昭和9）年。昭和初期に流行したモダニズム建築を踏襲し、水平曲線を駆使して優美さを演出している。現在も税関庁舎として使用されている。かつて船が基隆港に着くと、乗客はここで下船の手続きを済ませて駅へと向かった。そして、終戦時に台湾から引き揚げた内地人もこの建物を通して台湾を離れた。そんな人々の記憶の中に、この建物はどのような印象を残しているのだろうか。



基隆駅 開設は清国統治時代の1891年。明治町にあったが、隣接する旭町や高砂町、福德町が賑わっていた。日本統治時代の絵はがき。



海関大樓は日本統治時代の基隆港合同庁舎。現在も税関庁舎として使用されている。



義重町の様子。整然とした家並みを誇った目抜き通り。一帯は内地人（本土出身者）が多く集まっていた。日本統治時代の絵はがき。

町と港を見おろす公園と神社

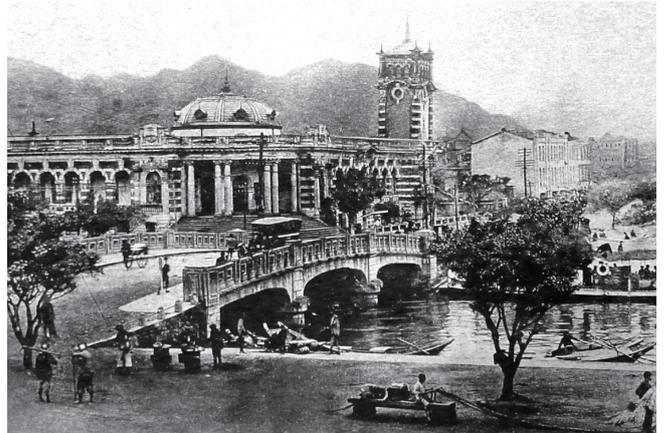
基隆にも神社は設けられていた。高台に鎮座し、家並みと運河を見おろせる場所であった。

基隆市政府（市役所）は日本統治時代に建てられた庁舎が今も使用されている。竣工は1932（昭和7）年3月23日。装飾を排したシンプルなデザインだ。これは昭和時代に入った頃の官庁建築によく見られたスタイルで、鉄筋コンクリート造りの堅牢な建物である。基隆神社はここから近い場所にあった。

基隆市役所の右隣には基隆公会堂があったが現存しない。そして、運河を挟んだ先には瀟洒なことで知られた基隆郵便局があった。こちらも戦後に改築されてしまい、古写真と人々の記憶の中にその姿を留めるだけになっているが、以前は基隆駅と並ぶ名建築とされていた。運河の水面に映える赤煉瓦造りの建物はひととき目立っていたという。

神社は現在、基隆忠烈祠となっている。鳥居は壊され、中華式の装飾を施したゲートが入口に見える。石段は残っているものの、すでに再整備されており、当時のものではない。

基隆神社の鎮座は1912（明治45）年3月9日。祭神には天照皇大神、大国魂命、大己貴命、少彦



名建築と謳われた基隆郵便局。残念ながら現在は建て替えられてしまった。日本統治時代の絵はがき。



神社の跡地には狛犬が残されている。石段の脇には石灯笼も残り、ここが神社であったことを伝えている。

名命、大物主命、崇徳天皇、そして、1895年に台南で客死した北白川宮能久親王を祀っていた。

石段を上っていくと、小さな広場がある。中央には蒋介石の銅像があり、家並みを見おろしている。忠烈祠は中華民国のために命を捧げた兵士を



基隆市役所。現在も市政府（市役所）として使用されている。当初は3階建てだったが、1966年に増築されて4階となった。

祀っている。神社の痕跡としては一对の狛犬と石灯籠が残るのみだが、その配列は神社時代のままである。本殿と拝殿はすでになく、そこには忠烈祠の社殿が建てられている。

なお、神苑はかつて旭が丘公園と呼ばれていたが、現在は中正公園という呼称になっている。ここからの眺めは戦前から知られ、基隆の家並みと港が一望できる。すべての道路は路地のように狭く、隙間はぎっしりと建物が埋め尽くしている。活気は感じられるものの、かなり雑然とした印象だ。これが基隆の現実である。

夜市に見る風土文化

基隆の夜市（ナイトマーケット）についても紹介しておきたい。ここは「廟口夜市」という名で親しまれ、常設の夜市である。基隆駅から繁華街を抜けて10分ほどなので、ぜひとも訪れてみたい。基隆の町は雑然としているが、ここを歩いていると、それもまた、この町の個性であるように思えてくる。ぎっしりと並んだ建物の間に、突如歴史ある古刹が現れたりするので、散策は楽しい。

廟口夜市は台湾の中でも種類が豊富な屋台街として知られ、味自慢の老舗が集まっている。港町らしく、海鮮を扱った屋台が多いのが特色だ。

名物はいくつかあるが、台湾の人々に人気があるのは「甜不辣（てんぷら）」と呼ばれる揚げ物。これはサツマ揚げのことだが、日本統治時代に九州出身者によってもたらされたものである。サメのすり身を用いて、高温の油でさっと揚げる。これに台湾ではよく用いられる甜辣醬（甘辛いケチャップ）を付けて食べる。現在は台湾各地で賞味できる定番の屋台料理で、ここ廟口夜市が台湾における元祖とされる。

ただ、残念なことがないわけでもない。1990年代後半から、台北市を中心に、夜市の衛生事情を改善しようとする動きが強くなった。もちろん、このこと自体は旅行者にとっては嬉しいことだ

が、そういった中、夜市ならではの風情というものは確実に消えつつある。

もともと、台湾の夜市は門前市の性格が強く、必ずと言っていいほど廟がある。その廟の参拝客を目当てに集まった屋台によって構成されている。当然ながら雑多な雰囲気が生み出され、これが風情となっていたが、再整備が進む中で、屋台の看板を統一したデザインにしたり、店員がお揃いの衣服を着たりしている。昔ながらの風情を味わうのなら、訪問は早いほうがいいかもしれない。

地方都市における美食探索

筆者はこれまで、何冊かの旅行ガイドブックを執筆してきたが、基隆をはじめとする地方都市の食事情をどのように紹介するかについては常に悩まされている。どのような場所をオススメとして取りあげるか、その選定が難しいのである。

台湾の食文化の奥深さは広く知られているが、台北や高雄、台中といった都市を除くと、店構えがしっかりとした観光客向けのレストランは多くない。しかも、あったとしても味の面で推薦できるかどうかは別問題である。基隆の場合も高級レストランと呼べそうなものはホテルに入っていることが多く、こういったところでは郷土の味覚や基隆ならではのご当地料理に出会える確率は低い。

台湾におけるグルメの神髄は屋台料理をはじめとする庶民の味覚にある。実際に台湾の地方都市におけるグルメ散策は庶民料理が基本となり、あくまでも街角の食堂や屋台で楽しむものである。

基隆の人々はやってきた友人をどういった店に連れていくかで親しみの度合いが分かるというエピソードもある。言うまでもなく、親しみが増せば増すほど、地元色の強い庶民派食堂へ連れて行くのである。

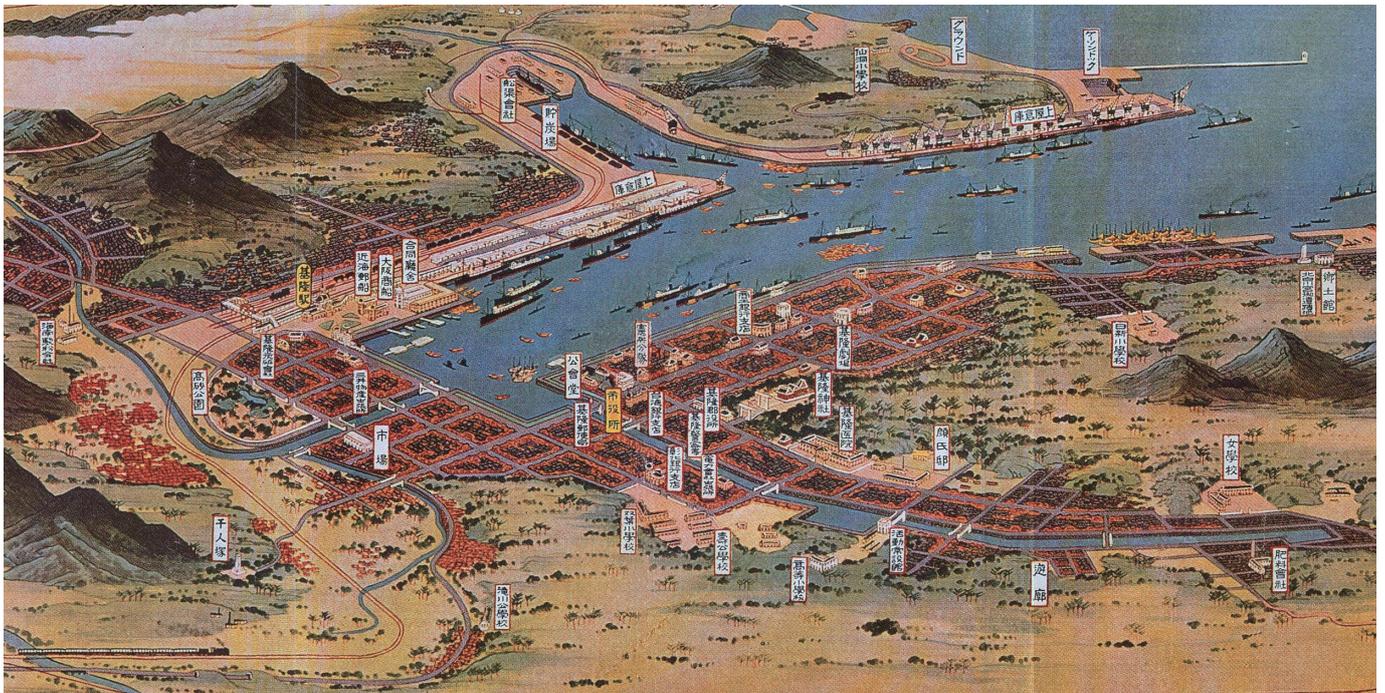
往々にして、台湾の地方都市では公的な会合やビジネス上での接待を除くと高級レストランで宴

席の場を設けることは少ない。多くの場合、夜市や町市場に併設された屋台街に連れていき、その町ならではの当地料理を食べさせてくれるだろう。地方都市を訪ねる際には、こういった郷土料理の類を存分に楽しみたいものである。

港とともに開かれ、港とともに発展してきた基隆。「全台湾の門戸」と称された頃の賑わいはないものの、独特な風情を楽しむことができる港町である。観光都市への脱皮をも図りつつあるこの町をじっくりと訪ねてみよう。



廟口夜市の様子。週末は動くのも不便なほどの人出となる。基隆ならではの料理も多いので、食べ歩きが楽しい。



基隆の鳥瞰図 昭和10年頃の様子。港湾を中心に計画的に整備されているのがわかる。右手にのびるのは田寮運河

片倉佳史（かたくら よしふみ）1969年生まれ。早稲田大学教育学部卒業。台湾に残る日本統治時代の遺構を探し歩き、記録している。これまでに手がけた旅行ガイドブックはのべ35冊を数える。そのほか、地理・歴史、原住民族の風俗・文化、グルメなどのジャンルで執筆と撮影を続けているほか、台湾の社会事情や旅行情報などをテーマに講演活動を行なっている。著書に『台湾に生きている日本』（祥伝社）、『旅の指さし会話帳・台湾』（情報センター出版局）、『観光コースでない台湾』（高文研）など。2012年には李登輝元大統領の著作『日台の「心と心の絆」～素晴らしき日本人へ』（宝島社）を手がける。最新刊は台北生活情報誌『悠遊台湾』。

ウェブサイト台湾特捜百貨店 <http://katakura.net/>